九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジッドとエドゥアール・デュジャルダン

吉井, 亮雄
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/1563579

出版情報 : Stella. 34, pp.333-360, 2015-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

KYUSHU UNIVERSITY

ジッドとエドゥアール・デュジャルダン

吉　井　亮　雄

エドゥアール・デュジャルダン――詩人・小説家で劇作家，文学・音楽の論客にして象徴派の闘士，さらには原始キリスト教の研究者……。多様な顔をあわせもつこの人物は存命中，文学的・学術的な名声に恵まれていたとは決して言えないが，初期作品のひとつ『月桂樹は切られた』が1920年代半ば，ジェイムズ・ジョイスを介しヴァレリー・ラルボーに評価・喧伝されてからは，「内的独白」の創始者として後世の文学史に相応の地位を占めるに至った。本稿では，彼がアンドレ・ジッドと交わした往復書簡（大半は未刊）を訳出・紹介し，一般には知られるところの少ない両者の関係を追跡・考察する。ただし現存の確認された書簡はわずか30通にも満たず，若干の遺失分を考慮に入れたとしても，ほぼ半世紀にわたるコーパスとしては極めて小さい。まさに間歇的な交流の反映ではあるが，それだけに情報の欠落・不足は否みがたい。筆者としては，書簡記述の理解を助けるべく折々に実証面での補説を試みるが，不詳とせざるをえない部分も少なからず出てこよう。大方におかれては，この点をあらかじめ宜しく承知されたい。

往復書簡紹介の前置きとして，ジッドの文通相手について，その経歴と初期の活動をごく簡略に述べておこう――。エドゥアール・デュジャルダンは1861年11月10日，ロワール＝エ＝シェール県ブロワ近郊の裕福な家庭に一人息子として生まれた。ジッドよりも8歳年長である。78年には両親の転居にともない上京，ルイ大王高等中学に学び，同校卒業後はソルボンヌ（歴史学）に学籍登録する。並行して，ドビュッシーやポール・デュカも通う国立高等音楽院（コンセルヴァトワール）作曲科に登録，エルネスト・ギローの指導を受けている。聖職志望であったが，ワグナーを発見し，マラルメの謦咳に接したのを機に宗教・歴史の研究を中断，音楽と詩に専念したことが彼のその後を決定する。ローマ通りの「火曜会」に足繁く通いながら，まずは文芸誌に依った活動を開始。85年にテオドール・

ド・ヴィゼヴァとともに『ワグナー評論』を創刊し，ルネ・ギルやスチュアート・メリルをはじめ象徴派の若手を糾合する。次いで翌年にはフェリクス・フェネオンの後を継ぎ『独立評論』の編集長に就いた（ただし両誌での活動は88年まで）。また同時期には『強迫観念』（1886年），『月桂樹は切られた』（1887年『独立評論』に連載，翌年単行出版）といった小説や短篇集を発表している。その後80年代末からの数年間は劇作家としての活動を中心にすえ，『アントニア』3部作を制作・上演するが，後述のように一般の評価は芳しいものではなかった。ジッドとの文通が始まるのはこの頃のことである[1)]。

*

ジッドとデュジャルダンが実際に相まみえた時期は定かでないが，前者の1898年9月27日付ヴァレリー宛書簡の記述を信じるならば，少なくともそれ以前に面識はなかった[2)]。いっぽう文通による交流は1891年に始まっている。以下に訳出するのは現存が確認された往復書簡の第一信だが，後掲のデュジャルダン書簡《13》《18》および《22》は，これこそがジッド側からの最初の便りだったことを濃厚に示唆する（なお，それに先立ちデュジャルダンが送ったはずの自作上演への招待状は今日にいたるまで見つかっていない）——

《書簡1・ジッドのデュジャルダン宛》

パリ，〔18〕91年7月1日

拝略

サブロン通りから戻ってきたところです。貴方がまだそこにお住まいだと思っていたのです。一昨日アンリ・ド・レニエが私にいくつかの上演計画を教えてくれていたので，貴方と少しお話ができれば嬉しかったのですが。『アントニア』上演の数日後にもパッシー〔サブロン通り〕のお宅を訪ねておりました。貴方の戯曲について私が覚えた感銘をすべてお伝えし，かねてより非常に強い共感を抱いていた貴方の面識をえ，そのうえでこの見事な上演にご招待くださったことのお礼を申しあげたかったのです。貴方の目には迷惑な見知らぬ者からの書き置きと映るだろう，そう思って名刺を残すのは控えましたが。

その数日後には南仏に出発したので再度お訪ねすることはできませんでした[3)]。また一通の手紙では陳腐なお祝いと，ほかの人たちと変わらぬことしか申しあげられないと思い，便りも差し上げなかったのです。

この新しい舞台の計画は，貴方にお会いする絶好の機会でしたが，ご住所を承知しておらず，やむなく〔貴方の版元レオン・〕ヴァニエ気付で一筆さしあげる次第です。

今回の件は議論を要するほど込み入ったものであるにもかかわらず，レニエからは不十分な情報しか受けることができなかったのです。

しかしながら率直にお答えします。貴方の試みは私にはきわめて興味ぶかく，それだけにつましい一株主か何かとして，どんなささやかなかたちでも貴方の計画に加われるならば喜ばしいところです。しかし残念ながら，拙著〔『アンドレ・ワルテルの手記』〕の2版連続出版に要した経費，その相当な経費をすべて自費で賄わねばならなかったため，懐はかなり不如意となり，どうも今年は新たな出費はできそうもありません。せめて席料か定期会員加入〔の勧誘〕で私を当てにしていただきたく――早くも昨日には何人かの友人に話をしましたが，彼らは私同様，定期予約の心づもりでおります――このようなささやかなお手伝いしかできず遺憾至極に存じます。敬具

アンドレ・ジッド

また私は，はたして貴方に『アンドレ・ワルテルの手記』をお贈りしていたかどうか，お尋ねしたいと思っておりました。〔というのも〕献呈先を記した紙を迂闊にも失くしてしまい，貴方にも一部差し上げていたのか思い出せずにいた次第。拙著の小型版はごく少部数しか刷られなかったので，献本の重複は避けたいところでしたが，それ以上に，粗忽や怠慢から貴方に拙著をお送りしていなかったとすれば，いっそう悔やむことになりましょう。献本を受け取っておられないならば（その場合はなにとぞご容赦のほど），一言いただければ幸いです。すぐにもお届けします。敬具

A・G

コマイユ通り4番地

書簡前段で話題にのぼる『アントニア』は，デュジャルダンの3部作戯曲『アントニアの伝説』の第1部で，この年の4月20日，ポール・フォール，リュネ＝ポーらの芸術座により，パリ9区サン＝ラザール通りのアプリカシオン劇場で上演されていた（観衆はジッドをはじめ招待客のみ）。主役のひとり「恋する男」は作者自身が演じている。第1部のみならず，連作全体がワグナー美学に想をえた反復主題（ライトモチーフ）と，短い自由詩で構成される長台詞（ティラード）の多用を特徴としたが，それにたいする評価は芳しくなく，後に第3部『アントニアの終焉』（1893年6月初演）を好意的に評したマラルメをのぞけば[4]，大方の批評家は文体や詩法の欠点を責め，凡庸な失敗作だと断じた[5]。2カ月半前の観劇で「感銘を覚えた」というジッドの文言が心からのものか否かは詳らかでないが（とはいえ，翌年の第2部『過去の騎士』〔後掲書簡4参照〕や，続く第3部の上演のさいも劇場に足を運んでいることから見て，それなりに強い関心を抱いていたのは確かだろう），このたび彼がデュジャルダンに直接詳しい話を聞こうとした「新しい舞台の計画」とは，ワグナー的演劇を継続的に実践すべく後者が

設立を願っていた「象徴主義劇場」のことを指す[6)]。しかしながら連作の不首尾が痛手となって，この常設劇場の計画は空しく頓挫してしまうのである。

後段で言及されるジッドの処女作『アンドレ・ワルテルの手記』(1891 年）にも簡略に触れておこう――。己自身の霊肉の葛藤を主題とするこの作品はジッドが「長い愛の宣言，愛の告白」と考えていたもので，彼のなかでは従姉マドレーヌへの愛と同一視されていた。同書を献ずることで彼女から結婚への同意をかちえ，少年期以来の長い春に終止符を打つ，それこそが執筆の最大の目的だったのである（実際にはこの目論見は 1891 年の年明け早々マドレーヌの拒絶によって脆くも崩れ，婚約・結婚までにはさらに 5 年近い歳月を要するのだが)。だが同時にジッドは，ゲーテに強く影響された自著が新たな『若きウェルテルの悩み』として多くの青年たちの共感をうると固く信じ，現実には売れる見込みのない自費出版だったにもかかわらず，普及版と豪華版という 2 種の刊本をそれぞれ別の版元から上梓しようとしたのである。ラール・アンデパンダン書店の豪華版が最初に出る予定だったが，作業の遅れからペラン学術出版の普及版が 2 月末に先行出来（しゅったい）する。しかしながら同版には誤植が数多く残っていたため，豪華版の準備が整うや，著者の命により直ちに廃棄されてしまう（この措置を免れたのはすでにプレスサービスに使われていた約 70 部のみ)。書簡においてジッドが「小型版」と呼ぶのは，190 部限定で刷られ，その多くが個人的な献呈に用いられた豪華版のことである。

ジッドの手紙にたいしデュジャルダンは，短く数行を書き添えた名刺（印刷された旧住所「サブロン通り 78 番地」は自筆で抹消）を送っている――

《書簡 2・デュジャルダンのジッド宛》

パリ，ラルジリエール通り 3 番地〔1891 年 7 月 3 日〕

拝略

素晴らしい内容のお手紙を拝受，厚くお礼申しあげます。貴方と面識がないのは残念ですが，それもきっと遠からず叶うことでしょう。ご高著『アンドレ・ワルテルの手記』は持っておりません。頂戴できるならば幸甚に存じます。敬具

エドゥアール・デュジャルダン

この短信を受けてジッドは，おそらくさほど日を置くことなく自作を文通者に贈った。デュジャルダンからは丁重な礼状が夏の休暇をはさんで届く（オート＝ガロンヌ県リュション発信，パリの住所も併記）――

《書簡 3・デュジャルダンのジッド宛》

パリ，ラルジリエール通り 3 番地
リュション，1891 年 9 月 4 日

拝略

『アンドレ・ワルテルの手記』を読了したところです。田舎の静寂のなかで時間をかけ，頭を休めて拝読しました。ご高著から受けたまことに深い感銘にたいしお礼を申しあげねばなりません。非凡なる真実の内的記述がどのページにも満ちています。文学的には私は貴方に完全に同意するというわけではありません。アンドレ・ワルテルの消化・消化不良という実に興味ぶかい問題を除外してしまうこのような精神主義（あえて「精神主義（スピリチュアリスム）」と申しあげます）には賛同できません，また形式にかんしては，小説や戯曲など，もっとかたちのはっきりしたもののほうが私の好みです。しかしながら，たとえ貴方とは意見が異なるにしても，それはただ私個人の問題であって，ご高著を貴方が経験なさったとおりの本と考えれば，私は芸術的には貴方に強く共感する読者となります。青春の漠たる印象，しかし貴方が（しばしば誰にも先んじて）定かに描いてみせるさまざまな印象をご高著の各所に認めた，そういう私の告白をぜひ貴方への大いなる賞賛と受けとっていただきたい。このまったく個人的な印象のゆえに私は貴方を祝福します。しかも，ご高著が芸術家の作品であると同時に人間としての作品であるだけに，心の底から祝福するものです。敬具

エドゥアール・デュジャルダン

この翌年の 6 月 17 日，『アントニアの伝説』の第 2 部『過去の騎士』がオペラ座界隈の近代劇場で上演される。「騎士」役リュネ＝ポー，「娼婦」役マルト・メロ（ちなみにメロは 3 部作すべてで主役の女性を演じる）。舞台装飾はナビ派の代表的画家モーリス・ドニが担当した。先述のようにジッドは今回も劇場に赴いたが，その数日後，上演と並行して出来したヴァニエ版刊本をデュジャルダンから贈られている。次はそれにたいする礼状――

《書簡 4・ジッドのデュジャルダン宛》

〔パリ〕1892 年 6 月 25 日，土曜

拝略

貴方のお芝居には真に感動し，歓喜の喝采を送っておりました。〔このたびの〕刊本ご恵送には厚くお礼申しあげます。お仕事の文学的価値を高く評価しておりますだけに，私を貴方の友人のひとりとしてお考えいただければと。敬具

アンドレ・ジッド

だがこの舞台は，ジャン・アジャルベールの証言によれば，批評家筋に「雪崩のごとき苛立ちに満ちた反応と死刑執行」を惹起したのであった[7)]。

翌年6月14日には，すでにマラルメの好意的な劇評にからめて触れたように，『アントニアの伝説』の最終部『アントニアの終焉』がキャピュシーヌ大通りのヴォードヴィル座で上演される。今回もモーリス・ドニが舞台装飾を担当したが，それに先立ちジッドは，この画家を通じてデュジャルダンに，自分とマルセル・シュウォッブのために席を2つ確保してくれるよう依頼していた[8)]。しかし実際に招待状を使い共に観劇したのはポール＝アルベール・ローランスであった。一週間ほどのちにジッドがドニに宛てた書簡――「僕はデュジャルダンのこの芝居を前桟敷で観た。そこには〔ガブリエル・〕トラリューと，ふたりのローランス〔ポール＝アルベールと，おそらくはその弟ジャン＝ピエール〕，蓬髪の〔ウージェーヌ・〕ルアール青年がいた。僕たちは〔劇がまきおこした〕一大スキャンダルを話題にしたように思う」[9)]。またしてもの惨憺たる失敗がデュジャルダンを以後永らく演劇活動から遠ざけることになったのは上述のとおりである。

*

それから2年が経過した1895年の春には，ジッドの最初のソチ『パリュード』の出版（409部限定，刷了は同年5月5日）を機に，デュジャルダンとの間に手紙が遣り取りされている。まずは献本にたいする後者の礼状――

《書簡5・デュジャルダンのジッド宛》

〔パリ，カルノ大通り21番地，18〕95年6月5日

親愛なる友

見事なご著書『パリュード』を有り難うございました。早速ざっと繙かせていただきましたが，熟読玩味は夏の休暇のために大切にとっておきます。

ご存じのように，私はご高著『ナルシス論』を持っておりません……。手に入れる方法はありましょうや。匆々

エドゥアール・デュジャルダン

ほんの数日前（5月31日）にジッドは母ジュリエットを亡くしていた。『一粒の麦もし死なずば』では必要以上に厳しく描かれた存在であり，その死が決定的な動因となってマドレーヌとの婚約・結婚が成就するとはいえ，それでもやはり，息子のことを想い「絶えず努めて何か善きもの，何かさらに善きものにむかって進んだ〈善意の人〉」[10)]を喪った痛みは大きかった。本書簡，それに続

いて届いたデュジャルダンの悔やみ状（未発見）への返書は，この悲しい出来事への言及で始まっている――

《書簡 6・ジッドのデュジャルダン宛》

カルバドス，カンブルマール経由，ラ・ロック・ベニャール
〔1895 年 6 月 23 日〕

拝略

『パリュード』にたいし丁重なお言葉をいただき有り難うございます。今朝，心のこもった別のお葉書を頂戴し，なぜ私のお返事がひどく遅れていたのか，その悲しい理由をご存じであることが分かりました。――嗚呼，拙著『ナルシス論』をまだお持ちでないというだけにいっそう気が滅入ります。というのも，拙著はもはや私の手元には一冊もなく，また私の承知するかぎり，バイイのところにもまったく残っていないのです。

〔パリに〕不在だったために，私自身は拙著『愛の試み』の〔各所への〕寄贈はできませんでした。発送を請け負ったモークレールは貴方にお送りしなかったのでしょうか。もしお送りしていないとすれば，献本をご希望でしょうか。この拙著を読む者は皆無でしたが，私が書いた最も出来のよい作品です。

いつの日か貴方にお会いしたときには，私の所有するご高著『強迫観念』に一言書き付けていただけるでしょうね。敬具

アンドレ・ジッド

象徴派の規範書とも呼ぶべき『ナルシス論』は，1891 年に非売の私家版がごく少部数刷られたのち，翌 92 年 5 月に 80 部限定で公刊されたが（版元は書状にあるようにエドモン・バイイの経営するラール・アンデパンダン書店），その多くは個人的な献呈にもちいられ，早くに品切れとなった。じじつ『パリュード』初版の標題紙裏面が掲げる著書一覧では，同書だけが唯一「絶版」と記されている。いっぽう第 2 段落の話題となる『愛の試み』（1893 年暮に 162 部限定で出来）にかんしては，たしかにカミーユ・モークレールが北アフリカ滞在中のジッドに代わり献本作業を引き請けており，その間の経過を 93 年 11 月半ばと翌 94 年 1 月に著者宛書簡のなかで報告していた[11)]。また最終段落で言及される『強迫観念』（1886 年，ヴァニエ書店刊）は，13 の短篇からなるデュジャルダンの処女作。モーリス・ロリナの『神経症』（1883 年）とならび，世紀末のいくぶんか病的な精神傾向を反映した著作である。

さらにこの 2 年後，ジッドからの新たな献本を受けてデュジャルダンが送った礼状が残されている――

《書簡 7・デュジャルダンのジッド宛》

〔パリ ?, 1897 年〕3 月 9 日，火曜

親愛なるジッド

『ユリアン〔の旅〕』『パリュード』の〔合冊〕新版をご恵送いただいたことにお礼を申しあげていたでしょうか。恥ずかしながら確信がもてません。とはいえ私はこの新版で両作を読み返し，文字どおり甘美な印象を覚えたところです。まことに有り難うございました。おそらくご記憶のことでしょう，私はアンドレ・ワルテルの大ファンです，そう，ずっと前から変わることなく！ 敬具

エドゥアール・デュジャルダン

前年暮に刊出した『ユリアンの旅』『パリュード』合冊新版（11 月 16 日刷了）は，ジッドが初めてメルキュール・ド・フランスに単行出版を委ねたもの。これが機縁となって彼は，『新プレテクスト』（1911 年）に至るまで，新作の大半を同社から上梓することになる。

1898 年秋から翌々年にかけては比較的頻繁に手紙の遣り取りがおこなわれているが，その具体的な内容となると，残念ながらほとんど不詳というのが実情である。理由は以下に述べるとおり――。後年（1934 年 11 月）デュジャルダンは，おそらく経済的な不如意のゆえに，マラルメやヴェルレーヌをはじめ同時代の作家・詩人から受けていた書簡や断片稿，自筆献辞入り刊本を競売に付した。当時の競売目録にしばしば見られるように（文通者両名がいずれも存命の場合は特にその傾向が強い），これら総計 180 のアイテムの紹介においても，書簡にかんしては原文からの直接引用は抑えられ，その要約は極端なまでに短い。不分明な点が多く残り，隔靴掻痒の感が否めぬ所以だが，当該書簡の現存確認という意味でジッド関連分を訳出しておこう。目録に記載されているのは，３つのアイテムに分割された計７通のハガキ・書簡である[12] ――

《書簡 8・ジッドのデュジャルダン宛 2 通》

署名入り自筆ハガキ 2 通，1899 年――『カンダウレス王』の校正刷およびアンリ・バタイユの韻文に関連。

《書簡 9・ジッドのデュジャルダン宛》

著名入り自筆書簡 3 頁，1900 年 8 月 18 日，キュヴェルヴィル――某雑誌用に書かれた短い散文詩「ハールレム周辺」を含む。

《書簡 10・ジッドのデュジャルダン宛 4 通》

署名入り自筆書簡 4 通，計 8 頁〔1900 年 ?〕――「アンジェルへの手紙」のなかで話

題にすべく，レンブラント展を鑑賞しにアムステルダムに赴きたい旨。/ 自身による講演 2 点の内ひとつを「レルミタージュ小叢書」で公刊するのに専心。ウージェーヌ・ルアール作のある小説について情報を求める。/ 自身の綴り字ミスについて語る，シンタックス論争に関連した書簡。

とりあえず本稿では各書簡について若干の補説を加えておこう――。まず目録が《8》のハガキ 2 通を「1899 年執筆」と断定するのは，消印の情報かジッド自身の日付記述にもとづいてのことと思われる。内 1 通にかんしては時期と話題（『カンダウレス王』）の齟齬もない（いっぽう「バタイユの韻文」が何を指すのかは不詳）。《9》は年月日と発信地が特定されており，これもまた封筒や書状自体の情報に依った記述であるのは疑えまい。じっさい散文詩「ハールレム周辺」はまさにこの 1900 年 8 月，リールの小文芸誌『レミシックル』に，「風景」の総題のもと「ドルトレヒト周辺」と並んで掲載されている[13]。

問題は《10》に纏められた 4 通の書簡だ。いずれも「1900 年？」と疑問符付きで時期推定がされているが，少なくとも「レンブラント展，云々」の一通はこの年ではなく，1898 年 10 月半ばから下旬にかけて発信されたものである。『レルミタージュ』誌に「アンジェルへの手紙」を連載中だったジッドは，アムステルダムでの大規模なレンブラント展が同月末日をもって終了するのを知り，25 日急遽かの地に向かっていたのだ[14]。書簡の内容にかんし付言すれば，「レルミタージュ小叢書」での出版計画とは，作家が 1900 年 3 月 29 日ブリュッセルでおこなった講演『文学における影響について』の単行出版のこと（もうひとつの講演『芸術の限界』は，実際に公衆を前にして読み上げられることはなかったが，翌年，同じ叢書から刊出）。だが，その他の話題「ウージェーヌ・ルアールの小説」「シンタックス論争」などは，情報が漠然としすぎており，具体的な対象が何であるかは特定しがたい。

*

これ以降の 10 年ほどについては両者の書簡は一通も確認されておらず，遺失分を考慮に入れても（たとえば，『背徳者』〔1902 年〕のデュジャルダン宛献本が存在することから[15]，当然それにからむ遣り取りはあったと推測されるが），ふたりが頻繁に文通していたとは考えにくい。そのような現存コーパスの

空隙を埋めるのが，次に引くジッド宛である。なお，同書状自体に年月は記されておらず，消印が押されていたはずの封筒も残っていない。しかしながら文中の「恋愛以上のもの」[16] という引用語句から，これが『狭き門』献本への礼状であるのは明白。さらに同書の刷了日（豪華紙使用の限定初版が 1909 年 6 月 12 日，普及版が同月 20 日）と用箋冒頭に記載の日付・曜日とを勘案・照合すれば，手紙は「1909 年 10 月 24 日」のものと容易に確定しうる――

《書簡 11・デュジャルダンのジッド宛》

パリ，ボワ・ド・ブーローニュ大通り 14 番地
〔1909 年 10 月〕24 日，日曜

親愛なる友

ご高著をお送りいただき有り難うございました。深い感銘を覚えつつ拝読しました。まさに内的にして深遠。この「恋愛以上のもの」〔神への献身〕は心を揺さぶります。読了以後，その思いが私をとらえて離しません。あらためてお礼申しあげます。敬具

エドゥアール・デュジャルダン

それから 4 年後の 1913 年夏，ジッドの元にはデュジャルダンがアントワーヌ座（パリ 10 区ストラスブール大通り）での開催を準備していたマチネの予告が届く――

《書簡 12・デュジャルダンのジッド宛》

アントワーヌ座
〔パリ，19〕13 年 7 月 28 日

親愛なるアンドレ・ジッド

9 月にアントワーヌ座で何回か詩の朗読のマチネを開催します。我々の仲間うちでもマラルメの火曜会に通っていた人たちだけに限定したマチネとなるでしょう。

朗読会の前には私自身が談話をし，後には若干の音楽と踊りが続く予定です。

貴方の詩をいくつか朗読させていただければと存じます。この催しにはアントワーヌ座が我々の必要とする団員を提供してくれるでしょう。しかし，もしご友人のどなたか（アントワーヌ座の団員たちのように）無償でご協力くださる俳優に読ませたいとご希望であれば，我々としては喜ばしいかぎりです。

ご一言いただきたく。上演時期に入り次第，委細をお知らせします。敬具

エドゥアール・デュジャルダン

予告どおりマチネは 9 月 25 日におこなわれるが，その具体的なプログラムは次のとおり――クローデル『交換』，フランシス・ジャム『迷える子羊』，デュジャルダン『アントニア』（朗読はマルト・メロとリュネ＝ポー），ポール・

フォール『ルイ 11 世』，マラルメ『エロディアード』。これらに先立っては，書状が記すように，デュジャルダンがマラルメについての講演をした[17]。いっぽうジッドの詩は当日の演目には入らなかった模様である。

*

現存コーパスにおける手紙の遣り取りは，第 1 次大戦をはさみ，ふたたび長く途絶える。じっさい，終戦の 4 年後に書かれたデュジャルダン書簡には，それまで両者の交流が稀であったことへの悔やみが記されている――

《書簡 13・デュジャルダンのジッド宛》

〔パリ，19〕22 年 11 月 28 日

親愛なるアンドレ・ジッド

貴方にお話ししたいことが 2 つありました。そのひとつは，ヴィエレ＝グリファンと私が立てた計画ですが，事を先に進めるまえに貴方のご意見をお聞きしておくことが是非とも必要だと考えております。お会いできるでしょうか。できれば午後に（木曜〔30 日〕は午後 4 時半から所用があります）お伺いできれば有り難く存じます。

この数日，書簡類を整理していて，貴方がくださっていた手紙を 3 通（1891 年，92 年，96 年）見つけました。いずれも友情にあふれた，私には（とりわけ現在の状況では）まことに貴重なもので，当時からこのかた，我々がほとんど相見えることのなかったのが一度ならず悔やまれた次第です。敬具

エドゥアール・デュジャルダン

当座の住所：
パリ 6 区，ノートル＝ダム＝デ＝シャン通り 3 番地

前段の「ヴィエレ＝グリファンと私が立てた計画」とは，旧師の没後 25 周年を記念して「マラルメの会（ソシエテ・マラルメ）」を設立しようというもの。翌年 6 月の同会発足までの経緯は，以後の書簡数通がかなり詳しく伝えてくれるので，それに譲ろう。後段の「ジッドから受けていた 3 通の手紙」のうち，1891 年付は前掲書簡《1》，翌 92 年付は《4》を指すが，96 年付は現存コーパスのなかには見当たらない。デュジャルダンの記述が誤りでなければ，遺失分に含まれるものということになろう。

ジッドがキュヴェルヴィル（同地には 11 月 28 日から 1 カ月ほど滞在）から出した返事は見つかっていないが，デュジャルダンは間をおかず次の書簡を送り，面談を求めた用件について，その骨子を記す――

《書簡 14・デュジャルダンのジッド宛》

パリ 6 区，ノートル＝ダム＝デ＝シャン通り 3 番地
〔19〕22 年 12 月 2 日，土曜

親愛なるアンドレ・ジッド

心のこもったお返事を頂戴し有り難うございました。お会いできず，まことに残念でした。マラルメの件にかんして私がお願いしたかったのは唯ひとつ，貴方のお考えをお伝えいただき，そして無論のことですが，会にご加入いただくことです。ヴィエレ＝グリファンと私は，ヴェルレーヌやボードレール，その他の詩人らになされたのと同じ処遇をマラルメにもしてやりたいのです。誰からも最も忠実な崇敬を捧げられたマラルメなのに，どうしてこういったものがいまだ存在していないのかと訝しい思いさえいたします，そうではありませんか。友人，というよりは「忠実な友たち」の集い，そして同時に詩人に相応しい記念碑の建立……。〔この手紙では〕細かな点にはいっさい触れません。我々は，まさにそういったことについて貴方とお話ししたいからです。これまでに話したのは，ただヴァレリー（彼は全面的に同意しています[18]），そしてレニエだけです（彼もまた同様）。ご存じのように，レニエはグリファンとは顔を合わせたくないのですが[19]，それでも賛同していることに変わりありません。

近いうちに上京のご予定はおありでしょうか。と申しますのは，手紙の遣り取りでは処理困難な問題が山積しているからです。先日も書きましたように，我々としては貴方のご意見を伺わないで事を前に進めたくはないのです。

細かな点ですが重要なのは，現在までの我々 4 名の意見は，いかなる「会長」も置かないというものです。あらゆるレベルの理由からそうすべきことが貴方にはお分かりいただけるでしょう。

さらにお話ししたい第 2 の問題については，ほんの少し説明を始めただけで何ページにもなってしまうでしょうから，貴方がパリにお出での時にしたいと思います（さほど急を要することでもありませんので）。敬具

〔エドゥアール・デュジャルダン〕

申すまでもなく，マラルメの集いのために我々が貴方にお願いするのは，貴方の加入だけではなく，できるだけ大きな協力をしていただけることです。どんなかたちで？ そのことこそ貴方とお話ししたいことなのです……。どのような委員会を作るか？ 誰とか？ そういった微妙な問題すべてについて数人の仲間うちでまず最初に意見調整をしておくべきなのです……。

第 3 段落で「いかなる〈会長〉も置かぬ」とあるのは，つまり旧師にたいしてメンバーは誰もが均しく弟子であり，格差は一切ないという意味であろう。そのかわりにデュジャルダンが事務局長，ヴィエレ＝グリファンが会計係に就き，組織の円滑な運営を図ることになる。

この翌週デュジャルダンは，先便の写しを同封しながら，再度ジッドに返答

を促す――

《書簡 15・デュジャルダンのジッド宛》

〔パリ，ノートル＝ダム＝デ＝シャン通り〕
〔19〕22 年 12 月 11 日

親愛なるアンドレ・ジッド

私の最初の手紙にたいし，かくも厚き友誼をもって早々とお返事をくださいましただけに，はたして私の次の手紙はお受けとりになったのだろうかといささか訝っております。その第 2 信（1912 年〔「1922 年」の誤り〕12 月 2 日付）では我々が貴方にお願いしたきことをご説明したうえで，頂戴しておりましたノルマンディーのご住所にお送りしていたのですが[20]。

というわけで，再度パリのご住所宛にお送りします。たびたびで恐縮ですが，〔書状で〕名前を挙げた友人たちや私は，いざ事を決するに先立ち，なによりも貴方のお返事をお待ち申しあげる次第です。敬具

〔エドゥアール・デュジャルダン〕

しかしジッドは，はからずも同じ日に，キュヴェルヴィルから次の手紙をデュジャルダンに送っていた――

《書簡 16・ジッドのデュジャルダン宛》

キュヴェルヴィル・アン・コー，〔19〕22 年 12 月 11 日

親愛なるデュジャルダン

パリで貴方にお会いしたいと思っておりましたが，上京は 1 月に延期せざるをえなくなりました。ただ私の意見はヴァレリーの意見とさほど違うとも思えませんが，私の名が彼の名とダブってもかまわないのでしょうか。貴方がたおふたりが如何様にお決めになるのかお教えください[21]。参加の心づもりは十分にありますが，しかし私としてはいったい何への参加ということなのか承知しておきたく。敬具

アンドレ・ジッド

浩瀚なヴァレリー評伝をものしたミシェル・ジャルティはジッドの躊躇をはじめ，この頃の情況を次のように要している――「各人の傷つきやすい自尊心が禍して事情は微妙なものとなる。ジッドはデュジャルダンを警戒し，ギュスターヴ・カーンも彼とはもう顔を合わせたくない。またレニエはヴィエレとの出会いを拒む。いずれにせよ，今やデュジャルダンは権威にすがるようにジッドに協力を請うのであり，〔その結果として〕翌 1923 年には同者に感謝の意を表明することになる」[22]。

この 1 カ月後デュジャルダンは，「マラルメの会」設立準備の初会合にジッ

ドを誘う。そのさい，あたかも彼とヴァレリーを一体と見なすがごとき文面は，言うまでもなく先のジッド書簡の記述に配慮してのことであった――

《書簡 17・デュジャルダンのジッド宛》

〔パリ ?，19〕23 年 1 月 18 日

親愛なるジッド

我らマラルメの集いの初回は，いたって内輪の集まりですが（参加者は 5，6 名でしょう），来週 22 日の月曜，ブルトゥイユ大通リ 77 番地乙のヴィエレ＝グリファン宅で開かれます。ヴァレリーが出席予定です。彼には先日の貴信の内容を知らせてあります。貴方がご欠席の場合は，彼が代理を務めるということになりましょう。

しかし私としては貴方にもお出でましいただければと存じます。重ねて申しあげますが，ご都合が許すならば，一同お会いできるのを心待ちにしております。敬具

エドゥアール・デュジャルダン

しかしながら，あいにく南仏ロックブリューヌに滞在中だったジッドはこの会合には出席できなかった。2 月に入ると，デュジャルダンから再び手紙が届く。今回は，同者の編集する季刊文芸誌『理想主義手帖（レ・カイエ・イデアリスト）』に過去のジッド書簡 2 通を掲載させてほしいと事後承諾を求める内容であった――

《書簡 18・デュジャルダンのジッド宛》

〔パリ ?，19〕23 年 2 月 5 日

親愛なるジッド

先月（あるいはむしろ 2 カ月前）貴方に手紙を差し上げたさい，マラルメの件と並んで，それとは逆にまったく個人的なことでお願いがあると申しあげておりました。30 年ほど前に貴方からいただいたお手紙のことだったのですが，貴方はそのうちの 2 通を，私がお送りする『理想主義手帖』のなかにお認めになるでしょう。この件については貴方とお話しし，活字化でお困りになる懼れはないか知りたいと思っておりました。お目にかかれずまことに遺憾に存じます。私にとって貴方の証言がとりわけ貴重なこの折柄，それを引用したのをきっと許してくださることでしょう。貴方は文壇で高位を占めておられます。そんな貴方の証言は決定的な価値をもたらす，今なお最も低き場に身をおく者がそう考えたことをどうかご容赦のほど。

まさにこの 1891 年，92 年の思い出にひたりつつ。敬具

エドゥアール・デュジャルダン

書簡の記述どおり『理想主義手帖』2 月号は，「ある文学スキャンダル」と題したデュジャルダンの長い巻頭論文のなかで，前掲書簡《1》《4》のほぼ全文を引用している[23]。彼にとってこの 2 通がいかに大きな励ましとなっていたか

が窺われて，まことに興味ぶかい。

この４カ月後ジッドは，デュジャルダンの反キリスト劇『死して復活せる神の謎』の初演（５月 26–27 日，於アントワーヌ座。作者自身が「詩人」による序詞を朗読）を見逃したことを詫びつつ，かねてより準備中だった「マラルメの会」の設立を祝す――

《書簡 19・ジッドのデュジャルダン宛》

〔パリ，19〕23 年 6 月 14 日

親愛なるデュジャルダン

パリに寄って（先日の夜には貴方〔の舞台上演〕に喝采をおくることができず残念でした）お手紙を受け取りました。「マラルメの会」設立の由，嬉しく存じます。

さっそく私のなすべきことをいたします。敬具

アンドレ・ジッド

数回の会合をへて新設されたこの組織（正式発足は 6 月 6 日）の委員には，文通者両名のほか，レニエやヴィエレ＝グリファン，ヴァレリー，アンドレ・フォンテナス，アルベール・チボーデ，それにマラルメの女婿エドモン・ボニオらが就いたが[24]，「さっそくなすべきこと」として各人は，デュジャルダンの指示のもと，会費 10 フランと，ヴァルヴァンの詩人宅を飾る顕彰メダイヨンの製作費として 50 フランを拠出している[25]。

しかし当初の記念行事が終わると，とりあえず所期の目標は達したと考えたのだろう，会員たちの活動は急速に停滞する。じじつ彼らがこれといった報告や証言を残していないことから見て，同会は次第に実質的な消滅へと向かったものと思われる。だがデュジャルダンその人の意気は衰えることがなく，たとえば翌 1924 年 7 月には『メルキュール・ド・フランス』に「生命力に充ちた象徴主義の連続性」と題する長い論考を発表し，流派の歴史を振り返りながら，マラルメらが説いた詩的理念の現代的価値を顕揚するのだった[26]。

＊

1930 年代に入ると，若干の遺失分を差し引いても，交わされる手紙の数は減ってくる。次は間違いなくデュジャルダンの先行書簡（未発見）への返事だが，ジッドは最初期の交流に言及しながら，「内的独白」かんする自分なりの考えを述べている――

《書簡 20・ジッドのデュジャルダン宛》

シャル＝レ＝ゾー，〔19〕30 年 7 月 4 日

親愛なるデュジャルダン

その代わり私は，ボディニエール〔アプリカシオン劇場の別称〕ではなかったでしょうか，小さな劇場でおこなわれた『アントニア』の上演のことはよく覚えています。貴方ご自身が最も重要な役を演じておられませんでしたか。

この作品〔『月桂樹は切られた』〕が私に何か影響を及ぼしたでしょうか。そうは思いません。しかし本当のところは誰にも分かりません。いずれにせよ，日付を照らし合わせるならば，貴方が先駆者であるのは明らかです。

ヴァレリー・ラルボーと交わした会話で私は，いつもそうするように〔彼の意見に〕譲歩しました。しかしポーのいくつかの物語（なかでも『告げ口心臓』）や，ブラウニングの見事な詩（とりわけ『霊媒スラッジ氏』）はやはり内的独白というこのジャンルの完璧で乗り越えがたい具体的成果です。そしてドストエフキーの忘れがたき『やさしい女』もまた。

貴方にとって大切なこの形式を私も幾度となく使ったと思っております。わけてもラフカディオによるフロリッソワール殺害が前者の独白によってのみ提示・説明される『法王庁の抜け穴』の数章において。

拙著『バテシバ』はダヴィデの長い内的独白にほかなりません。しかし舞台で外在化されてしまうと，それがなおも「内的」であると言えるのか，そうラルボーは反論していました。敬具

アンドレ・ジッド

本稿冒頭でも触れたが，『月桂樹は切られた』の「内的独白」を忘却の淵から救ったのはラルボーであった。『ユリシーズ』執筆にあたりジョイスがこの技法に大いに触発されたことを作家本人から聞き，またその後，自らもその独創性に強い感銘を受けていたラルボーは，1924 年，『月桂樹は切られた』決定版の刊行にさいし長い序文を寄せ，公に向けてデュジャルダンの先駆的な試みを高く評価したのである[27]。またそれに先立っては，周囲の作家・文学者らとの私的な会話や文通においても同じ旨をたびたび語っていた。上掲書簡が言及するジッドとの議論は 1923 年に交わされていたもので，たとえば同年 7 月下旬の往復書簡では同じ作家や作品（ブラウニング，ドストエフスキー，『霊媒スラッジ氏』，『法王庁の抜け穴』など）が引き合いに出され，また両者の見解の相違もかなり具体的なかたちで表明されている[28]。またデュジャルダン自身は 1931 年に著書『内的独白』を上梓し，この技法の由来や定義，受容・再評価の経緯をジッドら同時代人から受けた手紙の抜粋を引用しながら論ずることになる[29]。

1930年代半ばには数通の書簡が遣り取りされ，切れ切れに続いてきた交流に2つの挿話を添える。まずは1935年の春，ジッドが『新フランス評論』に掲載した日記（ただしその日付は1933年9月1日）のなかで聖パウロの言葉に言及すると[30]，それを目にしたデュジャルダンは次の手紙を送り，博学なキリスト教神学者として使徒書簡の典拠・来歴を俎上に載せている――

《書簡21・デュジャルダンのジッド宛》

パリ6区，ノートル＝ダム＝デ＝シャン通り3番地
〔19〕35年5月1日

偉大にして親愛なるアンドレ・ジッド

貴方が『新フランス評論』にお載せになった文章を感動と賛嘆の念をもって拝読しました。というわけで，4月1日号で貴方が聖パウロに帰し，いわゆるキリストの教えに関連づけておられた一文について，ひとりの「専門家」の立場から修正（と言えましょうか）を加えることをお許しください。

聖パウロの使徒書簡はお読みになっているはずです。貴方はそこに，あらゆる著述のうちでも文学的に最も力強いものとともに，愚かなまでの無味乾燥を認めて驚かれることはなかったでしょうか。また古代世界を打ち倒すことになる革新的精神のかたわらに，貴方の引かれた文がまさにその一例である順応主義を認めて驚かれなかったでしょうか。

ここ10年の成果をまとめた今秋出版予定の本（『キリスト教第1世代，その革新的運命』というのがその題名です[31]）のなかで私は，どうして使徒書簡が聖霊の偉大なる御業（みわざ）のうちに列せられていないのかを問うています。語彙や文法の不備が理由ではありません。真実のところは，正典が示すような使徒書簡は改竄者たちの手によって，かくのごとく愚かさと順応主義にまみれてしまったものなのです……。いつの日にか，それらの誤りを正し，とり除くことができるでしょうか……。基本的には可能だと思えます。しかしながら私は，毎頁の各所で，細部の難しい問題のために歩みを止められることになるのではと危惧します。

貴方が引用なさった「ローマ人への手紙」第13章1－7節について申せば，それは新約のなかでも最も典拠の疑わしいもののひとつなのです。この文は，聖パウロの没後半世紀，あるいは3四半世紀のあいだに広まったある精神状態を反映しています。すなわち同期間には，キリスト教革命を〔ローマ〕帝国と融和させようとした信者が存在する一方，山上の垂訓というトルストイ的な禁欲主義のなかに逃れる信者たちもいたのです。じっさい貴方もご存じのように，山上の垂訓を収める2つの福音書〔マタイ，部分的にルカ〕はまさに2世紀初めの30年ほどの間に記されています。したがって肝心な点は，聖パウロをキリストと対比させることではなく，使徒書簡に表れているようなキリスト教第1世代の革新的な試みを，それを大いに妨害した反革新的で福音主義的（エヴァンジェリック）な運動と対比させることなのです。

このことは碩学たちが論争することなのか，あるいは人間が抱える問題のひとつとして説明・解明することなのか，それこそが問題なのです。

長口舌をお許しのほど。敬具

エドゥアール・デュジャルダン

ジッドの返書は見つかっていないが，デュジャルダンの第2信からは，使徒書簡に関連した彼の主張にたいし，文通者が賛意を示したことが十分に読みとれよう。なによりも，ジッドがデュジャルダン前便の『新フランス評論』掲載を願った事実こそがそのことを雄弁に証言している――

《書簡22・デュジャルダンのジッド宛》

パリ6区，ノートル＝ダム＝デ＝シャン通り3番地

〔19〕35年5月4日

偉大にして賞賛すべき，親愛なるアンドレ・ジッド

お手紙は私にとって，貴方ご自身には想像もつかぬほど大きな励ましです。1891年に（『アントニア』について）書いてくださったお手紙を大切に保存しております。この貴信は一生をつうじ，挫けそうな私を守り支えてくれました。そして36年後〔「34年後」の誤り〕，生涯も終わり頃になってまたも貴方からお手紙が届く。しかもこのたびのお手紙は，貴方という今や聖別化された天才の威光とともに，滞りがちな私の仕事もまた人々の関心を呼びうるものだと教え励ましてくれるのです。

私の個人的なことは脇におき，それにしても，偉大なる作家にして同時に偉大なる精神，偉大なる意識を目にするのはなんと素晴らしいことか！

〔貴方宛の〕私の手紙を次の『新フランス評論』に載せてもよいかとお訊ねです。もちろんです。私のほうこそ今一度貴方にお礼を申しあげるべき，そう思し召せ。敬具

エドゥアール・デュジャルダン

かくしてデュジャルダン書簡《21》の全文が『新フランス評論』7月1日号に掲載されるが，そのさいジッドは次のような短いコメントを添えている――「レーニンは，自らが原始キリスト教の〈革命的民主主義精神〉と呼ぶものへの感受性を失うことは決してなかった（『国家と革命』第51頁を参照）」[32]。時あたかもソヴィエト共産主義に福音書的美徳の実現を期待していたジッドならではのコメントであった。

翌6月下旬には，カルチェ・ラタンのミュチュアリテ会館を会場として第1回国際作家大会が開催される。5日間にわたり，国内外から参集した120名を超す作家たちが，反戦・反ファシズムと文化の擁護・創造を旗印として，意見

表明や報告，討議をおこなったが，その初日（同月 21 日夜）に開会を宣言したのは外ならぬジッドであった。我々にとって興味ぶかいのは，偶々ではあろうが，同じ晩の締めくくりにデュジャルダンが演壇に立っていることである――「私のような年齢の人間にできるのはただひとつ，証言者の立場から諸君に若干の示唆を与えることである。〔…〕私の証言とはこうだ。つまり，もはや文化は存在しない。ブルジョワ社会はもはや文化が何を意味するのかさえ分からなくなっているのだ」。こう始まる意見表明は，いかにも政治の時代の熱を宿す次のような言葉で結ばれていた――「プロレタリアートが必要とするのはプロレタリア文化である。革命が必要とするのは革命的な文化である」[33]……。

1930 年代の書簡が語るもうひとつの挿話は，ジッドとデュジャルダンともどもに苦い後味を残すことになる。すなわち，詩人顕彰のための新たな組織「アカデミー・マラルメ」の設立をめぐって生じた齟齬が，結果的には両者の関係に不幸な終止符を打つのである。同会設立の具体的な経緯は詳らかでないが，発足後まもなく『ヌーヴェル・リテレール』に載った無署名の寸評によれば，「先頃のある晩のこと，レンヌ通りのカフェで，謎めいた様子のエドゥアール・デュジャルダンがジャン・アジャルベールとアンドレ・ビイに向かってアカデミー・マラルメの計画を切り出すと，ふたりは大喜びで賛同した」[34] ……。この話は，そこに名の挙がったビイ自身が示唆するところでは，1936 年の 11 月末から 12 月初めにかけてのことのようだが[35]，もちろん相談を持ち掛けられたのが彼らふたりだけであったはずはない。じじつジッドとは 12 月 4 日に面談の機会がもたれている（後掲書簡 25 参照）。また，この年に「象徴主義 50 周年」を記念した大規模な展覧会が国立図書館で開催（初日は 6 月 23 日）されたことも計画の発案・実行を後押しする要因となっていただろう[36]。

翌年 2 月半ばにはメンバーの顔ぶれは固まっていた。デュジャルダンのほか，ヴィエレ＝グリファン，ヴァレリー，アジャルベール，アンドレ＝フェルディナン・エロルド，アンドレ・フォンテナス，ポール・フォール，サン＝ポル＝ルー，モーリス・メーテルランク，アルベール・モッケル，そして少なくとも当初はメンバーになることを承諾していたジッドである。そのジッドは同時期，『ソヴィエト旅行記修正』の執筆に専念するためしばらくパリを離れていたが，デュジャルダンからの手紙（おそらくは同一内容の再送）を受け，次のような短信を返している――

《書簡 23・ジッドのデュジャルダン宛》

キュヴェルヴィル（クリクト＝レスヌヴァル）
1937 年 2 月 18 日

親愛なるデュジャルダン
たしかに住所に間違いがありました。しかしいずれにせよ私は〔パリを留守にしているため〕昼食には伺えなかったでしょう。まことに残念に存じます。敬具

アンドレ・ジッド

この「昼食」こそは「アカデミー・マラルメ」発足の集いのことであった。翌 19 日，パリ 2 区サントーギュスタン通りのレストラン「ドルーアン」で開かれた会合には，メーテルランクとモッケル，ジッドをのぞく計 8 名が参加し，ヴィエレ＝グリファンを会長に選出している[37]（ちなみに，その折りに撮影された一同の記念写真は，文学史的資料のひとつとして現在も随所で複製・掲載される）。

だが間を置かず微妙な軋みが生じてくる。数日後ジッドが再度デュジャルダンに送った短信には，なんとも意外な言葉が書き付けられていた――

《書簡 24・ジッドのデュジャルダン宛》

パリ 7 区，ヴァノー通り 1 番地乙
〔19〕37 年 2 月 24 日

親愛なるデュジャルダン
私にはこの新たなアカデミーの職責をはたしうる資格があるとはとうてい思えません。私のことに思いを馳せていただいたことは有り難く存じますが，なにとぞ穏便に身を引かせていただきたく。敬具

アンドレ・ジッド

ジッドの通告に続き，彼自身の指示によるか否かはともかく，『新フランス評論』の 3 月 1 日号が，「出来事」と題した雑報欄に，次のような素っ気ない一文を掲載する――「アカデミー・マラルメが設立される。会はサン＝ポル＝ルー，デュジャルダン，ヴァレリーら，すでに 10 名のメンバーを擁する。クローデル，ジッド，ジャムは参加を断る」[38]。これに追い打ちをかけるように 5 日後の『ヌーヴェル・リテレール』は，遠慮のない筆致で事の概略を報告した。記事の題名たるや《溶け崩れるアカデミー》――「これは流行病（エピデミー）なのだろうか，それともマラルメに纏わることはすべて永遠の不運を刻印されるのか。参加を拒否したフランシス・ジャム氏，初めは承諾したが，ほとんど直ちに翻意したポール・クローデル氏に続いて，今度はアンドレ・ジッド氏がごく最近

設立されたアカデミーから身を引く。〔…〕５つ空席があるが，秋までにはこれを埋めなくてはなるまい。その時までに新たな辞退者が出ないとしてのことだが（出ない，と果たして誰が言いきれようか？）」[39]……。

ジッド辞退の真の理由は，ほかでもない，長らく絶交状態にあるクローデル，その影響のもと自分を批判して止めないジャム，このふたりがメンバーに加わると知ったためであった（そして先に不参加を決めた彼らカトリック作家たちとしても事情は同様であったはずだ）。とはいえ，それを前面に押し出すことはさすがに憚られる，だからこその曖昧・微妙な表現「穏便に身を引く」であったように思われる。

しかしデュジャルダンの側としては，礼を尽くして協力を要請し，一度は承諾を得ていただけに，そう簡単には引き下がれない。ジッドの不実を強く責めながら，しかしなおも彼の参加を期待するのであった――

《書簡 25・デュジャルダンのジッド宛》

パリ６区，ノートル＝ダム＝デ＝シャン通り３番地
〔19〕37 年３月７日

親愛なるアンドレ・ジッド

貴方がアカデミー・マラルメへの参加を「拒否」したと読者に告げる『新フランス評論』のノート（それは正確ではありません。というのも，12 月４日にお願いに上がった時点では貴方は承諾されていたからです），それに続いて，貴方が「参加を辞退した」という『ヌーヴェル・リテレール』の囲み記事（２月 24 日付の貴信でお知らせくださったご意思に沿った内容）を読んで，いたく悲しんでおります。

つまり貴方は私の２月 25 日の返信には心を動かされなかったということなのでしょうか[40]。我々にこのような悲しみや迷惑をもたらして好しとされたのでしょうか。

このような迷惑？…… 我々にとってどれほど不快なことかは『ヌーヴェル・リテレール』の囲み記事を読むだけで十分でしょう！ それに続いてどんなコメントが〔ほかの紙誌に〕出てくるかも容易に想像がつくところです！

私が 12 月４日，貴方のところに伺ったとき，あるいは２月に結成集会の昼食に参加していただくようお願いしたときでさえ，ただ「否」と答えてくださっていればまだしも……。いいえ違います，貴方は我々のメンバー表に名前が載るのを承諾なさった。しかも貴方は，すべてが決定した後になって前言を翻されたのです。

もっと酷いことがあります……。２月 24 日に貴方は私に宛てて「穏便に身を引きたい」と書いて寄こされた。おそらくは読者たちの注目を集めることなく，リストから貴方の名前をすっぱりと落とすこともできたでしょう。しかるに，穏便に身を引きたいというご希望を私に告げられたまさにその週，『新フランス評論』に，次いで数日後には『ヌーヴェル・リテレール』にあの告知が載ったのです。

たしかに貴方自身からではないでしょう，しかし貴方が不参加の考えを漏らされた誰かが『新フランス評論』に情報を流したのは明らかです。というのも私は，貴方には我々のもとに留まっていただきたいと願い，2月24日のお手紙については完全に沈黙を守り，誰にたいしても，妻にさえも口外していなかったのです！

『新フランス評論』『ヌーヴェル・リテレール』両紙誌のノート（そしておそらくこれに続いて発表されるいくつものコメント）が我々に及ぼした迷惑を償うためにも，親愛なるアンドレ・ジッド，どうかもう一度，当初の決定に立ち返り，我々の会にお留まりください。

私の方としては『新フランス評論』『ヌーヴェル・リテレール』に載った情報を否認することはせず，貴方にかんして何も公にしないとお約束します。

この出来事は忘却の淵に沈めましょう。アカデミー・マラルメの件で貴方のことが問題になることはもうありません。それが最上の解決策だと確信しております。

貴方に賞賛と友情，尊敬の念をいだく若いころの仲間たちにたいし，貴方が迷惑をかけるつもりなぞなかったと十分承知しておりますので，アカデミーの〔実務を負わぬ〕名誉会員（イン・パルティブス）に留まっていただきたく……。アカデミー・マラルメの名誉会員，そういう肩書ではお気に召さないでしょうか。

最後に申しあげますが，いずれにせよ貴方のご決定が広く知られるようなことがあれば，我々としては悲しく，また遺憾に存ずる次第です。敬具

エドゥアール・デュジャルダン

デュジャルダンの苦情と懇請にたいしジッドが返答したか否かは不明だが，いずれにしても彼が翻意することはなかった。そればかりか，爾来1951年の死去まで彼が発信した3,000通近い書簡にも，またその日記や随想にもデュジャルダン（1949年没）の名が挙がることは，筆者の承知するかぎりただの一度もないのである。このような顕著な偏りに照らせば，アカデミーの一件を境に両者の関係が急速に途絶へと向かったのはまず間違いあるまい。いかなる感情の機微が禍したのか，まさに呆気ないほどの幕切れではあった。

註

1）以下の論述で訳出・引用するジッド＝デュジャルダン往復書簡のレフェランスについては，煩瑣なれば逐一の指示はおこなわない。稿末に「往復書簡一覧」を掲げるので，これを参照されたい。

2）« Je ne connais pas Dujardin. »（lettre de Gide à Valéry, du 27 septembre 1898, dans leur *Correspondance (1890-1942)*, nouvelle éd. par Peter Fawcett, Paris :

Gallimard, coll. «Cahiers André Gide» n° 20, 2009, p. 512).

3）ジッドは同年5月4日パリを発ち，6週間にわたり南仏に滞在（水浴療法のため半月間ガール県ラフー＝レ＝バン，次いでモンペリエ，ユゼス），パリに帰着したのは6月15日のことであった。

4）Voir Stéphane MALLARMÉ, *Divagations*, in *Œuvres complètes II*, éd. Bertrand MARCHAL, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2003, pp. 191-196.

5）Voir Jacques ROBICHEZ, *Le Symbolisme au théâtre. Lugné-Poe et les débuts de l'Œuvre*, Paris : L'Arche, 1957, pp. 189-190, note 2.

6）Voir Henri de RÉGNIER - Francis VIELÉ-GRIFFIN, *Correspondance (1883-1900)*, éd. Pierre LACHASSE, Paris : Honoré Champion, 2012, p. 614, note 4.

7）Jean AJALBERT, *Mémoires en vrac. Au temps du Symbolisme (1880-1890)*, Paris : Albin Michel, 1938, p. 204.

8）Voir André GIDE - Maurice DENIS, *Correspondance (1892-1945)*, éd. Pierre MASSON et Carina SCHÄFER, avec la collaboration de Claire DENIS, Paris : Gallimard, coll. «Les Cahiers de la NRF», 2006, p. 96, note 2.

9）*Ibid.*, p. 96.

10）André GIDE, *Si le grain ne meurt*, in *Souvenirs et voyages*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2001, p. 188.

11）「君が僕にくれていたリストと指示書きをバイイに渡した。その通りに事は運ぶだろう。プレスサービスについて，〔アンドレ＝フェルディナン・〕エロルドは君に〔スチュアート・〕メリルも加えてほしいと頼んでいる。僕としては，素晴らしき人物アルベール・サマン，それによければ，君のことをとても好いている〔ジョルジュ・〕ロッシュグロスを入れてもらえると有り難い。また君が疑問符を付していたラシルドも加えた。雑誌としては，『白色評論』『メルキュール』『アール・モデルヌ』『ソシエテ・ヌーヴェル』『フロレアル』『レルミタージュ』，そして『ルヴュ・アンシロペディック』に送ろう（これらの雑誌は何でも話題に取り上げるし，僕たちに好意的に対応してくれるから）。ほかに希望があるかどうか，またメリル，サマン，ロッシュグロスへの献呈に同意するか否かを知らせてくれたまえ。〔マルセル・〕シュウォッブもいるが，君が名前を挙げていたか否か僕にはもう好く分からない。本件について何なりと，そしてほかに希望はないか，また手紙で知らせてくれたまえ」（1893年11月17日付ジッド宛モークレール書簡，パリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫，整理番号γ675.17，未刊）/「君にはまだ『愛の試み』〔の献呈〕については一言も知らせていなかった。君が望んでいたように，すべてはバイイによって厳密に実行されたと知っていたかな？ 僕としては一切遺漏がないように気を配った」（1894年1月18日付，同文庫，整理番号γ675.19，未刊）。また93年11月1－3日付の母ジュリエット宛ジッド書簡には次のような記述がある――「モークレールが僕の小さな冊子の出版にかんし，すべての献呈と煩わしい雑事一切を引き受けると実に気前よく申し出てくれています」（André GIDE, *Correspondance avec sa mère*

(1880-1895), éd. Claude MARTIN, Paris : Gallimard, 1988, p. 217 ; voir aussi la note 4 pour la page 176)。

12) *Lettres et manuscrits autographes d'écrivains modernes et contemporains ; appartenant à M. Édouard Dujardin, fondateur de la Revue indépendante et de la Revue wagnérienne, et à un autre amateur*. Paris : Pierre Berès, [1934], item n^{os} 34-36. ちなみに，この競売に出品されたマラルメ書簡は 49 通，ヴェルレーヌ書簡が 23 通と，デュジャルダンが崇敬する 2 大象徴派詩人のものが群を抜いて多くを占めている。

13) 「ドルトレヒト周辺」と「ハールレム周辺」の 2 詩篇はミシェル・デコーダンが『ルヴュ・デュ・ノール』1954 年 4－6 月号（Michel DÉCAUDIN, « Une petite revue née à Lille en 1900 : *L'Hémicycle* », *Revue du Nord*, n^{o} 142, avril-juin 1954, p. 394）で全文を紹介するまで一度も再録されることがなかった（『フロレアル』誌 1892 年 3 月号に同じく「風景」の総題のもと初掲載され，後に NRF 版『ジッド全集』第 1 巻〔1934 年〕に収録された詩篇群はこれとは全くの別物）。未だなお参照されることの稀なテクストであるだけに，この機会を利用して原文を掲げておこう――

PAYSAGES

I

ENVIRONS DE DORDRECHT

Froide à ma main, mais pour elles tiède, je sens, ah ! dans cette eau brunie, ces vivantes racines heureuses.

Là, couché près d'elles, la joue contre le sol et sur l'herbe froissée, j'imagine la volupté des plantes. Roseau, croître ; aboutir à une hampe assurée ; laisser qu'elle s'incline au vent… Un rat d'eau traverse l'eau brune ; il s'approche… La nature m'accueille vraiment. Tranquille, immobile comme un morceau d'aviron qui pourrit, je veux que l'herbe, que le rat, que le roseau m'oublient… Sommes-nous bien ainsi ?…

Je sais bien que là-bas, au loin s'étend et fuit le paysage ; mais, plus grand que le reste fuyant de la terre, le roseau balancé s'élève — autant que le bruit que le vent en le courbant fait — au-dessus du cri des marins, au loin, là-bas, larguant les voiles.

II

ENVIRONS DE HAARLEM (AVRIL)

Mais vivre, on le pourrait volontiers, dans ce pays riche en nuances — près de ce chant d'oiseau ; sous ce nuage, dont le soleil trop matinal ne fait point d'ombre.

La route que j'avais suivie le matin était d'un bout à l'autre pavée de briques. Un noir canal incessamment la longeait. De l'autre côté du canal, des crocus, au ras du sol tendre ; culture de blanc, de jaune, de mauve ; crocus

rangés par carrés, par couleur. Non loin un peu de neige fanée reste encore. Au loin, les dunes. — Puis des choucas qui volent lourdement sur de grandes étendues d'herbe.

14）Voir la lettre de Gide à André Ruyters, du 18 octobre 1898, dans leur *Correspondance (1895-1950)*, éd. Claude MARTIN et Victor MARTIN-SCHMETS, Lyon : Presses Universitaires de Lyon, 1990, t. I, p. 99 ; et celle du même à André Fontainas, du 18 ou 19 du même mois, in « André GIDE - André FONTAINAS : *Correspondance (1893-1938)* », présentée par Henry de PAYSAC, *Bulletin des Amis d'André Gide*, n^os^ 103-104, juillet-octobre 1994, p. 405.

15）略標題紙に «à Édouard Dujardin / en amical souvenir / André Gide» と自筆献辞の入ったこの『背徳者』初版（豪華紙使用の限定 300 部）は，2013 年 12 月 18 日サザビーズ・パリで競売に付されている。

16）「恋愛以上のもの mieux que l'amour」は，最終的な別離を前にした会話でアリサがジェロームに放つ言葉からの引用。Voir André GIDE, *La Porte étroite*, in *Romans et Récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2009, t. I, p. 888.

17）Voir Edmond STOULLIG, *Les Annales du Théâtre et de la Musique*. Trente-neuvième année 1913, Paris : Libr. Paul Ollendorff, 1914, pp. 227-228. 付言すれば 7 月 8 日には同じアントワーヌ座でデュジャルダンの 5 幕劇『マルトとマリー』（1913 年作）の再演がおこなわれている（主役はエヴ・フランシス）。

18）ジッドはそこに重要性を認めたのだろう，「ヴァレリーは全面的に同意している」というデュジャルダンの記述に下線を引き，かつ書状欄外の対応箇所に十字印を打っている。

19）1883 年にパリのスタニスラス学院で知り合って以来，レニエとヴィエレ＝グリファンはきわめて親密な交友関係にあったが，1900 年に仲違いをしてからは，頻繁だった文通もぴたりと途絶え（voir RÉGNIER – VIELÉ-GRIFFIN, *Correspondance (1883-1900), op. cit.*），とりわけレニエのほうはヴィエレ＝グリファンを避けることが多くなっていた。

20）前述のようにジッドは年末までキュヴェルヴィルに滞在していたので，デュジャルダンの第 2 信は同地で受け取っていたはずである。

21）この 2 日後（12 月 3 日）のヴァレリー宛ジッド書簡には「君はデュジャルダンのことを知っている思う，僕よりは好く」とあり，本件にかんする判断はヴァレリーに委ねたいといった様子が窺われる（GIDE – VALÉRY, *Correspondance (1890-1942), op. cit.*, p. 858）。前註 18 も参照。

22）Voir Michel JARRETY, *Paul Valéry*, Paris : Fayard, 2008, p. 536.

23）Voir Édouard DUJARDIN, « Un scandale littéraire », *Les Cahiers idéalistes*, nouvelle série, n° 7, février 1923, p. 14. なお，この季刊文芸誌の詳細については以下を参照—— Jean-Michel PLACE et André VASSEUR, *Bibliographie des revues et jour-*

naux littéraires des XIX^e^ et XX^e^ siècles, Paris : Éd. Jean-Michel Place, 1973-77, t. III, pp. 39-71.

24）Voir JARRETY, *op. cit.*, p. 547.

25）この翌日（6月15日），ジッドが会計担当のヴィエレ＝グリファンに宛てた書簡を参照—— André GIDE, *Correspondance avec Francis Vielé-Griffin (1891-1931)*, éd. Henry de PAYSAC, Lyon : Presses Universitaires de Lyon, 1986, p. 57.

26）Voir Édouard DUJARDIN, « La vivante continuité du Symbolisme », *Mercure de France*, 1^er^ juillet 1924, pp. 55-73.

27）Voir Édouard DUJARDIN, *Les lauriers sont coupés*. Préface de Valery LARBAUD, Paris : Albert Messein, 1924（préface de Larbaud aux pp. 5-16 ; parue précédemment dans *Intentions*, n^o^ 27, septembre-octobre 1924, pp. 1-8, et reprise dans *Ce vice impuni, la lecture… Domaine français*, Paris : Gallimard, 1941, pp. 247-255）.

28）Voir la lettre de Larbaud, du 23 juillet 1923, et la réponse de Gide, du 31 du même mois, in *Correspondance André Gide - Valery Larbaud (1905-1938)*, éd. Françoise LIOURE, Paris : Gallimard, coll. « Cahiers André Gide » n^o^ 14, 1989, pp. 203-204.

29）Voir Édouard DUJARDIN, *Le Monologue intérieur. Son apparition, ses œuvres, sa place dans l'œuvre de James Joyce*, Paris : Albert Messein, 1931（邦訳『内的独白について』〔鈴木幸夫・柳瀬尚紀訳〕，思潮社，1970年）。なお参考までに「内的独白」にかんする代表的な研究書を年代順に挙げておこう—— Kathleen M. MCKILLIGAN, *Édouard Dujardin : « Les Lauriers sont coupés » and the interior monologue*, Hull : University of Hull Publications, 1977 ; Frida S. WEISSMAN, *Du monologue intérieur à la sous-conversation*, Paris : Éd. A.-G. Nizet, 1978 ; Dorrit COHN, *Transparent minds. Narrative modes for presenting consciousness in fiction*, Princeton, N.J. : Princeton University Press, 1978（trad. française : *La transarence intérieure. Modes de représentation de la vie psychique dans le roman*, trad. par Alain BONY, Paris : Éd. du Seuil, coll. « Poétique », 1981）; Valérie MICHELET JACQUOD, *Le Roman symboliste : un art de l'« extrême conscience »*, Genève : Droz, 2008（II^e^ partie, ch. I : « Édouard Dujardin et le roman de la vie intérieure », pp. 237-298）.

30）Voir André GIDE, « *Pages de journal (1933)* », *La NRF*, 1^er^ avril 1935, pp. 509-510.

31）じじつ，この著書は同年アルベール・メッサン社から公刊されている（Édouard DUJARDIN, *La Première Génération chrétienne. Son destin révolutionnaire*, Paris : Albert Messein, 1936）。

32）André GIDE, « *Pages de journal (suite)* », *La NRF*, 1^er^ juillet 1935, p. 50.

33）*Pour la défense de la culture. Les textes du Congrès international des écrivains, Paris, juin 1935*. Réunis et présentés par Sandra TERONI et Wolfgang KLEIN, Dijon : Éditions Universitaires de Dijon, coll. « Sources », 2005, pp. 103-104. 同書に先行して我が国で編纂・邦訳された次の刊本も参照——『文化の擁護——1935年

パリ国際作家大会』(相磯佳正・五十嵐敏夫・石黒英男・高橋治男編訳), 法政大学出版「叢書・ウニベルシタス」, 1997 年, 55–58 頁。なお大会中のジッドの言動については, 彼の盟友とも呼ぶべきマリア・ヴァン・リセルベルグの証言を参照—— *Les Cahiers de la Petite Dame. Notes pour l'histoire authentique d'André Gide*, t. II, Paris : Gallimard, coll. « Cahiers André Gide » n° 5, 1974, pp. 462-465.

34) [Non signé], *Les Nouvelles littéraires*, n° 750, 27 février 1937, p. 3, col. 5.

35) André Billy, « Propos du samedi : Une nouvelle Académie va naître la semaine prochaine [...] », *Le Figaro*, 13 février 1937, p. 5, col. 5. Voir aussi Paul Léautaud, *Journal littéraire*, nouvelle éd. en 3 vol., Paris : Mercure de France, 1986, t. II, p. 1783 (13 février 1937).

36) Voir *Cinquantenaire du Symbolisme*, catalogue de l'exposition, Paris : Bibliothèque Nationale, 1936. この展覧会カタログはデュジャルダンを象徴派「第 1 世代」, ジッドを「第 2 世代」に分類し, いずれにも一項を割いている (116–118, 181–184 頁参照)。ちなみに, 展覧会開催を目前に控えた 6 月 20 日の『ヌーヴェル・リテレール』では, フレデリック・ルフェーブルの有名な連載インタビュー「……との 1 時間」が, ギュスターヴ・カーンと並んでデュジャルダンを取り上げている (voir Frédéric Lefèvre, « Une heure avec Édouard Dujardin. Témoin du Symbolisme », *Les Nouvelles littéraires*, 20 juin 1936, p. 3, col. 1-2)。さらに付言すれば, 同じ 1936 年, デュジャルダンがマラルメや象徴派について論じた過去の文章に加筆し『友人のひとりによるマラルメ』(*Mallarmé par un des siens*, Paris : Éd. Messein, 1936) を上梓するのも, 以上のような象徴主義回顧の盛り上がりと無関係ではあるまい。

37) だがヴィエレ＝グリファンは同年の 11 月 12 日に死去。代わってサン＝ポル＝ルーが新会長に選出される。以後, 同会はメンバー交代を重ねながら今日まで続く。

38) [Non signé], *La NRF*, n° 283, 1er mars 1937, p. 483 [rubrique « Les événements » du *Bulletin*].

39) [Non signé], *Les Nouvelles littéraires,* n° 751, 6 mars 1937, p. 3, col. 4.

40) デュジャルダンの返信は未発見であるが, その内容はおおよそ推測できよう。

* * *

ジッド＝デュジャルダン往復書簡一覧(書き手・日付／発信地／レフェランス)

往復書簡の大部分は未刊である (すでに全文, またはある程度の分量が活字化されているのは 1・4・14・20・21 の 5 通のみ)。レフェランス欄においては, オリジナルないしその写しの所在が判明している場合にはそれを初めに掲げる。

1.	G = 01.07.1891	Paris	CG 00722 ; *Les Cahiers idéalistes*, n° 7, février 1923, p. 14.
2.	D = 03.07.1891	Paris	BLJD γ 489.2.

3.	D = 04.09.1891	Luchon	BLJD γ 489.3.
4.	G = 25.06.1892	Paris	*Les Cahiers idéalistes*, n° précité, p. 14.
5.	D = 05.06.1895	Paris	BLJD γ 489.9.
6.	G = 23.06.1895	La Roque-Baignard	CG 00723.
7.	D = 09.03.1897	Paris ?	BLJD γ 489.1.
[← 10.]	G = 00.10.1898	Paris	Vente Dujardin, item n° 36.
8.	G = 00.00.1899	S. l.	Vente Dujardin, item n° 34 (2 cartes postales).
9.	G = 18.08.1900	Cuverville	Vente Dujardin, item n° 35.
10.	G = 00.00.1900 ?	S. l.	Vente Dujardin, item n° 36 (3 lettres).
11.	D = 24.10.1909	Paris	BLJD γ 489.4.
12.	D = 28.07.1913	Paris	BLJD γ 489.5.
13.	D = 28.11.1922	Paris	BLJD, MNR Ms 30.8.
14.	D = 02.12.1922	Paris	BLJD, MNR Ms 30.9 ; *Corr. G/V*, p. 858.
15.	D = 11.12.1922	Paris	BLJD, MNR Ms 30.10.
16.	G = 11.12.1922	Cuverville	BLJD, MNR Ms 30.4.
17.	D = 18.01.1923	Paris ?	BLJD, MNR Ms 30.11.
18.	D = 05.02.1923	Paris ?	BLJD, MNR Ms 30.12.
19.	G = 14.06.1923	Paris	BLJD, MNR Ms 30.5.
20.	G = 04.07.1930	Challes-les-Eaux	CG 00264 ; Dujardin, *Monologue intérieur*, Paris : Messein, 1931, pp. 22, 66 et 72.
21.	D = 01.05.1935	Paris	BLJD γ 489.6 ; *La NRF*, juilet 1935, p. 50.
22.	D = 04.05.1935	Paris	BLJD γ 489.7.
23.	G = 18.02.1937	Cuverville	BLJD, MNR Ms 30.6.
24.	G = 24.02.1937	Paris	BLJD, MNR Ms 30.7.
25.	D = 07.03.1937	Paris	BLJD γ 489.8.

Références abrégées :

BLJD : Bibliothèque littéraire Jacques-Doucet, Paris.

CG : Dossiers de la Correspondance générale d'André Gide, Centre d'Études Gidiennes, Tupin-et-Semons.

Corr. G/V : André GIDE - Paul VALÉRY, *Correspondance (1890-1942)*, nouvelle éd. par Peter FAWCETT, Paris : Gallimard, coll. « Cahiers André Gide » n° 20, 2009.

MNR : Fonds Henri Mondor, à la BLJD.

Vente Dujardin : *Lettres et manuscrits autographes d'écrivains modernes et contemporains ; appartenant à M. Édouard Dujardin, fondateur de la Revue indépendante et de la Revue wagnérienne, et à un autre amateur*. Paris : Piere Berès, [1934].